

9 脊髄損傷者の生活スタイルの変化に伴う足趾の管理に関する調査

～自立訓練から社会復帰する過程において～

○国立障害者リハビリテーションセンター自立訓練部機能訓練課 山下歩美

元国立障害者リハビリテーションセンター自立訓練部機能訓練課 山本恵子

【目的】自立訓練から就労移行支援へ移行した脊髄損傷者が、足趾の管理をどのようにしているか、どのように対処したかを生活スタイルの変化に注目して調査し自立訓練での援助方法を検討する。

【研究方法】対象者：脊髄損傷者4名 調査期間：平成26年8月～平成27年1月
個室で1人30分程度のインタビューを行い、足部の撮影をした。録音データから逐語録を作成し内容の類似性によりカテゴリーを作成した。

【倫理的配慮】対象者に研究の主旨と得られたデータは研究以外では使用しないことを説明し、書面で同意を得て所属施設の倫理委員会の承認を得た。

【結果】インタビュー内容を分析した結果、3つのカテゴリーが抽出された。

1. 足趾のことよりも職業人としての振る舞いを優先する

A氏は、就労移行支援では足趾のことよりも訓練に集中して取り組むことを重視し、障害者としてではなく社会人としての自分を見せるように努力する「人」に変わっていた。

2. 他者の経験を聞いて自分なりの解決方法を獲得する

A氏は、陥入爪が悪化したとき周りの経験者のアドバイスにより治療を受ける決意ができ、B氏はインターネットで情報を集めて自己管理を行い、C氏は他者に相談して、自分なりの解決方法を獲得していた。

3. 対象者個人のみでの管理には限界があった

A氏は、陥入爪を繰り返し、抜爪術を受けて症状が緩和した。B氏は足の裏が極度に汚れていた。忙しい訓練生活の中で自分ができる方法で行っていたが、対象者個人のみでの管理には限界があった。

【考察】就労移行支援では、対象者全員が就職に向けて熱心に訓練に取り組み、訓練を優先し一番の関心事が将来のことになっていた。足趾の管理は、生活スタイルに合わせて自分ができる方法で管理していた。本研究の対象者が、足趾の管理に関して自分なりの解決方法を獲得したことは、何らかの行動の必要性を自覚する事ができたからだと言える。また、他者が足趾のトラブルをどう解決したかを聞き、就職活動に精を出している姿を見て自分にも可能なのではないかという思いや、小さな目標を達成してきたことが自信になったと考えられる。

【結論】

1. 就労移行支援では、障害者としてではなく社会人としての自分を見せるように努力する人になり、足のことよりも職業人としての振る舞いを優先するようになった。

2. 訓練生活環境の中で生まれたピアサポートを受け、自分なりの解決方法を獲得した。

3. 対象者個人のみでの管理には限界があった。足趾の管理能力の向上につながる情報の提供、看護師による支援と定期管理が必要である。